

通常学校で頑張る障害児たち

活動先：特別支援学級

これまでのサービスマーケティングを通して気づいたことは、サービスマーケティングで実際の現場をみることによって、大学の講義だけでは学ぶことのできないような、生の声を聞くことができ、現在起こっている問題を少しでも身近に感じることができるようになるということを感じた。そうすることによって、講義の中で学んだことを実際の現場に出て、確かめるといふこと、実際に現場を見て感じることで、講義の中で言っていたことをより深めていくことができるのではないかと思う。自分が一度経験することによって、学びは濃いものとなりその後も強い印象となって、自分の頭の中に記憶されていくのではないだろうか。サービスマーケティングを通して成長したことは、物事をいろいろな側面からみることができるようになったところだと思う。障がいのある子どものことを知ろうと考えた時に、その子どものことだけを考えるのではなくて、それを支える家族の気持ちや問題、学校現場における子どもを教育する教師の気持ちや問題、子どもが住んでいる社会や地域の問題など、多くの人々が関係してくるということを感じた。今回のサービスマーケティングでは、障がいのある子どもを支える母親にインタビューを行い、その母親が障がいに対しての正しい理解を広める活動をしている、保護者の頑張る姿をみてきた。そして次に、学校現場における子どもの学ぶ姿や子どもたちを教育する教師の姿をみてきた。そこから、障がいのある子どもの問題は家族や学校だけで解決することはできない、全ての人々が一体となって支えあい、地域で育てるといふ大切さや、障がいについて多くの人々が理解する必要性を学んだ。次からは、社会や地域の人々が障がいのある子どもに対してどのような取り組みを行っているのかということについて考えていきたいと思う。それは保護者のインタビューから子どもが大きく成長しても、地域とのつながりを持ち続けていってほしいという願いを直接聞いたからである。そして、一人でも多くの人に障がいについて正しく理解してもらおう活動もしていきたいと考えている。活動を通して、班員との連絡を取り合う大切さを学んだ。片方の人々が相手とのアポイントメントを取っていたため、もう一人の人に情報を共有することが必要だと感じた。そのためには進行状況を自分から聞いてみることや、話してもらおうなどの報告・連絡・相談の3つが非常に大切となってくる。これは今回のようなグループ内での活動だけでなく、社会に出て、仕事をしていくにあたって重要になってくる事だと思う。社会に出る前にそのようなことを感じることができ、大切さを知ることができたことはとても良い学びだと思う。

この活動を通して見えてきた地域活動や社会課題は、1979年(昭和54年)に養護学校が義務化となり、障がいのある人も全ての人々が学校に通えるようになった。このことにより、現在の特別支援学校が地域に設置されるようになった。確かに、障がいのある子どもも学校に通えるようになり教育を受けられるようになったことは良いことだと思う。しかし、それによって、障がいのある子どもたちは「特別支援学校」という枠に閉じ込められてし

まったのではないかと思う。特別支援学校に通わせることによって地域の人との関係も希薄化され、健常児にとっても障がいのある子どもを知る機会、関わる機会が減ってしまい地域から余計に隔離させてしまったのではないだろうか。そのことを考えると障がいのある子を通常学校に通わせることは、健常児にとっても障がいのある子を知る良い機会になると思う。小さい頃から関わっていれば大人になってからも、周りに障がいのある人が地域にいても偏見などを持たず、上手く共存しながら生活を送ることができるのではないかと予想する。しかし、現在の状況では、通常学校に通っている子がいて、知るチャンスがありながらも周りの人の障がいに対する理解は低いように感じる。障がいに対して考え、知る機会をつくる必要があると思った。そして学校は、憲法で条件整備義務があるので障がいのある子がいても、きちんと教育をする責任があるということを忘れてはならない。人には人の人生があり、それを生きる権利があるということ。そういった当たり前のことを大切にできる社会でありたいと思う。